

市外―吉野ヶ里遺跡・佐賀城方面

高島 信 正

十一月四日は晴天で、市外史跡探訪に最高の日であった。バスは一路「吉野ヶ里遺跡」へと進む。

高齢者団体として入場したが、場内は小中学校の団体見学が多く老若男女が入り混じる遺跡と化している。吉野ヶ里は国営公園と県立公園に指定されている地域で、現在も発掘調査が続けられている。

広大な駐車場から田出川の橋を渡り進むとそこが吉野ヶ里歴史公園遺跡エリアである。外環濠を渡り、インディアン部落にあるような外敵からの進入を防ぐ逆茂木の塀を通り吉野ヶ里遺跡内に入る。

とにかく広い。遺跡エリアにはまつりごとの場所である北内郭、王や支配層が住んでいた南内郭、歴代王の墓がある墳丘墓跡、一般の人々の墓地である甕棺墓列、祭り・政治・儀礼などの道具を作る場所「中のムラ」、一般の人々の居住地「南のムラ」、倉庫群があり市も開かれていた「倉と市」等々が存在し、国家というイメージが湧く。

凄いの再現された建物が、発掘された位置に柱の穴の位置まで一致させて建てられていることだ。王達の墓が広くゆつたりと造られているのに対し、庶民の墓はびっしりと甕棺が並べられている。甕棺は非常に大きく制作は現代の技術でも難しいと思われる。当時の技術の高さがうかがわれる。

吉野ヶ里は、弥生時代前期丘陵帯に分散的に「ムラ」が誕生し、やがて南側に環濠をもつ集落が出現、「ムラ」から「クニ」の中心集落へと発展する兆しが見えてくる。

弥生中期には、大きな外環濠が掘られ、首長を葬る「墳丘墓」やたくさんの「甕棺墓列」も出現する。集落の発展とともに、その防衛も嚴重になっていくことから「争い」が激しくなってきたことがうかがえる。

後期には国内最大級の環濠集落へと発展し、大規模な外環濠に囲まれ、さらに特別な空間である二つの内郭（北内郭・南内郭）をもつようになる。これらの内郭には、祭殿や物見櫓などの大型の建物が登場し吉野ヶ里の最盛期となる。

感想としては「とにかく広い遺跡だ。」「これだけの広大な遺跡を残すことが出来たのは素晴らしい。」「二千年以前の日本にこのような帝国が存在したとは」「世界遺産にすべきではないか」等々。

「邪馬台国」はこの吉野ヶ里ではなかったのか。魏志倭人伝の記述しか残っていない為色々な説が闊歩するが、この遺跡を實見した今では、この考えが強くなった。

それを實証するためにも早く箸墓の発掘を期待したい。宮内庁の早い決断を要望する。

◎別件ですがお願いがあります。現在「別府川柳の歴史」を書くため、「別府の川柳」を調査中です。別府市・大分県の川柳に関する資料がありましたらお貸し下さい。古い資料ほどありがたいです。(高島)

(電話0977-6610401)

